

伊那方言「づら」：統語的特徴に関する
予備的研究

村杉 恵子

『アカデミア』文学・語学編
第103号 抜刷 2018年1月
南山大学
名古屋市昭和区山里町18

ACADEMIA Literature and Language (103)
January 2018 Offprint
NANZAN UNIVERSITY
18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya, Japan

伊那方言「づら」：統語的特徴に関する 予備的研究

村杉 恵子

要 旨

本稿は、消えゆく方言のひとつである伊那方言の表現「づら」の文法について、記述し、分析する。湯澤（2003）のデータを整理し、それを基礎として、生成文法理論を背景にパラダイムを作り、母語話者に文法判断を仰ぐことによって、伊那方言の文法を記述し、一般化し、生成文法理論の枠組みで説明することを試みている。

本稿では、伊那方言「づら」は認識様態のモダリティ（epistemic modality）の表現であり、その選択の特性に関して「だろう」と共通することを示した。Saito（2015）は、「だろう」などの認識様態のモダリティ（epistemic modality）の表現がその補部に TP（Tense Phrase）を選択するとする提案をしている。本稿では、その分析が、伊那方言「づら」についても説明力をもつことを論じ、伊那方言「づら」の統語的分布もまた、選択的な特性によって説明されうることを示唆するものである。

1. はじめに

世界の「言語」の数が減りつつある。2009年、ユネスコは消失危機言語として2500の言語を挙げているが、その中には日本国内で話されているアイヌ語、八丈語、奄美語、国東語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語も含まれている。しかし、多方言国家ともいえる日本において、言語消失の危

機はこれら八つの言語にとどまらない。いわゆる「方言」を母語とする話者の数は、年々減少しつつあり、方言は、刻々とその多様性を失いつつある。

長野県南部の伊那・飯田地方周辺の方言（本稿では仮に伊那方言と称する）には独特の特徴がある¹⁾。その一つとして、(1)において下線で示した「づら」を挙げることができる²⁾。()内は、その文のおおよその意味をいわゆる標準語であらわしたものである。

- (1) a. 昨日えつ あんた 畑に 行ったづら
 (昨日あたりに、あなたは 畑に行ったでしょう。)
 b. 明日は雨づら
 (明日は雨だろう。)

方言に特有の言い回しが、実際の方言とは異なる用法で、小説、漫画、アニメ映画などで、(時に揶揄されるかのように)用いられることがあるが、「づら」もまたその例外ではない。近年、小学生を中心として人気のある『妖怪ウォッチ』のコマさんは、田舎から都会に出てきた妖怪として描かれているが、彼の発話は、(2)に示すように、末尾に付加される「づら」によって強く印象づけられる。しかし、それらの「づら」の用法は、実際の伊那方言では非文法的な文あるいは不適格な文と判断されるものを多く含んでいる。#の付与された文は、伊那方言話者にとって()内の意味をあらわす文としては不適格であると判断されることを示す。

1) 「づら」は長野県南部の他にも、静岡県や愛知県の一部でも用いられていると言われているが、本稿は、筆者の実母(村杉恵美子、昭和12年から昭和30年まで伊那地方に居住)の母語である伊那方言の文法判断に基づき、その文法を記述し、分析を試みるものである。
 2) 多くの文献や記事においては「ズラ」と表記される場合が多い。しかし、本稿では歴史的に完了の「つ」に推量の「らむ」の付いた「つらむ(つろう)」の音変化と考えるため、ここでは「づら」として統一的に表記する。

- (2) a. # これ、いま、(自分が) 食べるづら
 (今、これを(自分が) 食べます。)
 b. #1 づら! (点呼)
 (1!)

「づら」を用いる伊那方言話者には、(2)に示されているコマさんの「づら」の用法は奇異に聞こえ、一様にこれを非文あるいは非適格文であると判断する。

また、伊那方言話者は、(3)に示すように「づら」と「だに」を区別して用いている。「外は雪でしょうね」という推量の意味で「外は雪だに」とは言えず、また、外は「雪だよ」と話し手が聞き手の知らない情報を与えるときには「外は雪づら」とは言えない。

- (3) a. 外は雪づら (外は雪だろう)
 b. 外は雪だに (外は雪だよ)

さらに(4)に示すように「だに」は「に」と似た意味で用いられるが、場合によって「だに」がついたり「に」がついたり、その分布には一定の規則的な特徴がある。*の付された文は、それが非文法的であることを示している。

- (4) a. ざざむし、食べるに (ざざむし、食べるよ。)
 b. *ざざむし、食べるだに (ざざむし、食べるよ。)

伊那方言では「ざざむしを食べるよ」という意味をあらわすのに、「食べるに」とは言えるが「食べるだに」とは言えないのである。どういうときに「に」をつけて、どういうときに「だに」がつくのか、伊那方言話者は、それがな

ぜかは説明できなくとも、例外なく等質の文法判断をするのである。

文法知識とは人に与えられた種に固有の知識であり、無意識の知識である。人は、自分のもつ文法については、それがなぜ文法的であるか、あるいは非文法的であるかを明示的に説明することはできない。まして、母語獲得の過程において、幼児はどの文が非文であり、それはなぜかを説明されることはない。仮に親が幼児に、文法を説明したとしても、言語獲得途上の幼児がそれを理解することは難しい。(2) や (4b) のような文を非文あるいは不適合であると判断する文法知識が母語話者に共通するものであるならば、その非文性を決定する根幹的な要因は、人間という種に与えられた言語特性に依るものであると考えることができる。

現在、「づら」は、伊那・飯田地方周辺に居住する若者にはほとんど用いられていない。伊那方言を特徴づけていた「づら」は、現在は消失しつつあり、その意味で、伊那方言もまた、危機言語のひとつであるといえよう。

本稿は、消えゆく方言のひとつである伊那方言の文末表現の特徴について、その文法を記述し、説明することを目的とする。本稿の第二節では、「づら」の統語的ふるまいについて、パラダイムを作り、母語話者に文法判断を仰ぐ形式で記述する。第三節ではその記述に基づいて、生成文法の枠組みで分析を与え、第四節で本論をまとめる。

2. 「づら」の統語的特徴

2.1. 分布

湯澤 (2003) は、自身の母語である伊那方言について『おらが知ってる伊那の方言』の中で、「づら」(「ズラ」) について以下のように記述している。ここでは「づら」の表記法も含め、原本のまま引用する。

(5) ○○ズラ ○○ズラナエ

○○でしょう ○○でしょうかねえ?

あれは仙丈ズラ (でしょう) その右エ

明日は 学校へ 行くんズラ? ズラ?…は少し上げる。

(説明をして念をおして確かめる)

若いシユウは ヨーサになると何処へ 行くズラ?

ホンニ どこへ 行くズラ ナエ? ナエ?…は少し下げる。

(同意を求めながら疑問を持って話す)

湯澤 (2003) の記述が明らかにすることは多い。「づら」は、統語的には名詞句(「仙丈」)や文を名詞化する要素のひとつである「ん」(の)ならびに動詞句(「行く」)に後続し、また、統語部門と談話の中間にある発話/伝達のモーダルである「なえ」には先行することを示している。また、「づら」は、少なくとも意味的には、おおよそいわゆる標準語における「だろう」や「でしょう」に相当し、推量や推測、確認などをあらわし、認知的モーダル(井上 1976)と称されるものに通ずることがうかがわれる。

日本語には、主語とモダリティとの「呼応・一致」が見られるとする指摘がある(仁田 1991, 上田 2007)。たとえば、上田 (2007) で示された日本語では認識モダリティ(判断のモダリティ)が主語の人称を制限しているとして示される例をみてみよう。

(6) a. きっと、{僕/*君/彼}は行くだろう。(推量) [-2人称]

b. {僕/*君/彼}は行くまい。(否定推量) [-2人称]

c. {僕/*君/彼}は行くでしょう。(推量) [-2人称]

(6) は、「君」が主語として許容されないのは、認識モダリティ(判断のモダリティ)が、主語の人称を制限し、主語とモダリティとの「呼応・一致」があるためであると説明されている例である。

この文法判断については、筆者を含め、異なるとする意見があるが、伊那方言の「づら」にもそのようなモダリティ表現と連動した人称制限は観察されない。意味的には(6a)や(6c)に示された「でしょう」「だろう」に相当する「づら」は、(1a)、(7a)ならび(7b)に示すように、その主語として二人称(「君」,「あんた」など)を許容する。では「づら」とはどのような特徴をもつ表現なのか。以下、典型的には文末にあらわれる「づら」について、その特徴を整理していくことにしよう。

まず、(7)と(8)に示すように「づら」は、(時制あるいはアスペクトを伴った)動詞句ならびに形容詞句に後続することができる。

- (7) a. 今日えつ あんたは 畑 行くづら
(今日あたり、あなたは 畑に行くでしょう?)
b. きのうちえつ あんたは畑 行ったづら
(昨日あたり、畑に行ったでしょう?)
c. 今ごろ、電車に乗ってるづら (今ごろ、電車にのっているでしょう。)
d. 今ごろ、駅に着いてるづら (今ごろ、駅に着いているでしょう。)

- (8) a. かわいいづら (かわいいだろうね。)
b. かわいかったづら (かわいかっただろうね。)

さらに、「づら」は、(9)にそれぞれ示すように名詞句や形容動詞の語幹、さらに(10)に示すように後置詞句に後続することができる。

- (9) a. あの 誰づら (あの人は誰でしょう。)(自分に問う)
b. 明日は 雨づら (明日は雨でしょうね。)
c. あの娘は けなげ づら (あの娘は けなげでしょうね。)

- (10) a. あの電車は新宿からづら (あの電車は新宿からでしょう。)
b. コンサートは2時までづら (コンサートは2時まででしょう。)
c. (壁を塗ったんだって?) べとべとにづら (べとべとにでしょう。)
d. (指を切ったんだって?) この包丁でづら (この包丁ででしょう。)
e. (学校を休んだって?)
はやりのインフルエンザでづら
(はやりのインフルエンザででしょう。)

(10)に示したように「づら」は場所や時の後置詞句のみならず、方法や理由の後置詞句にも後続してあらわれうる。更に、「づら」は(11)に示すように副詞にも後続することができる。

- (11) a. がちゃがちゃにづら
(がちゃがちゃに(乱雑に)でしょう。)
b. バタンとづら
(バタンとでしょう。)

これらのパラダイムを見る限り、「づら」は、一見、文末であればどのような統語範疇にも後続しうる文末表現であるかのように見える。

しかし、その分布を詳細に検討すると、「づら」は単純な文末表現ではなく、いくつかの特殊な性質を担うことがわかる。たとえば、「づら」は、(12)に示すように繫辞(「だ」)や形容動詞、ならびにいくつかの文末助詞には後続することができない。

- (12) a. 外は雪(*だ)づら
b. (あの娘は)けなげ(*だ)づら (けなげでしょう。)
c. (あの娘は)けなげ(*な)づら (けなげでしょう。)

(17) (あの娘は) けなげ (*な) わ

(18) に示すように「づら」は、繋辞とは一切共起できないのに対して、「わ」は繋辞「だ」の終止形(「けなげだ」)とは共起できる。しかしながら、両者とも、形容動詞の連体形(「けなげな」)には後続できない点においては(16)と(17)にみたように共通した性質を示すのである。

- (18) a. (あの娘は) けなげ (*だ) づら (けなげでしょう。)
b. (あの娘は) けなげ * (だ) わ

また両者は「の」に導かれた節に埋め込まれることもできない。

- (19) a. 芳夫は、またスイスに行くづら
b. 芳夫は、またスイスに行く (*づら) のを楽しみにしている
c. 三和子は、またスイスに行くわ
d. 三和子は、またスイスに行く (*わ) のを楽しみにしている

さらに、疑問詞「の」にも選択されることはない。

- (20) a. 芳夫は、またスイスに行くの?
b. 芳夫は、またスイスに行く (*づら) の?
c. 芳夫は、またスイスに行く (*わ) の?

このように、あらわれうる位置とあらわれえない位置の両方において共通点がある一方で、「わ」は「づら」には、異なる統語特徴がある。以下、顕著な相違について四点述べる。

第一に、「わ」は、(9)ならびに(10)に示した「づら」とは異なり、名

詞句や後置詞といった時制を欠く要素には後続することはできない。「づら」は(9)と(10)にそれぞれ示すように名詞句や形容動詞の語幹、さらに後置詞句にも後続することができる。

- (9) (再掲)
a. あの 人 誰づら (あの人は誰でしょう。)(自分に問う)
b. 明日は 雨づら (明日は雨でしょうね。)
c. あの娘は けなげ づら (あの娘は けなげでしょうね。)

- (10) (再掲)
a. あの電車は新宿からづら (あの電車は新宿からでしょう。)
b. コンサートは2時までづら (コンサートは2時まででしょう。)
c. (壁を塗ったんだって?) べとべとにづら (べとべとにでしょう。)
d. (指を切ったんだって?) この包丁でづら (この包丁ででしょう。)
e. (学校を休んだって?)
はやりのインフルエンザでづら
(はやりのインフルエンザででしょう。)

一方で、「わ」は、名詞句や形容動詞の語幹、さらに後置詞句にも後続することができない。「わ」は(時制やアスペクトを伴う)文や、繋辞を含む述部に後続しなくてはならないのである。

- (21) a. *あの 人 誰わ (あの人は誰でしょう。)
b. *明日は 雨わ (明日は雨でしょうね。)
c. *あの娘は けなげ わ (あの娘は けなげでしょうね。)

- (22) a. *あの電車は新宿からわ (あの電車は新宿からでしょう。)

- b. *コンサートは2時までわ (コンサートは2時まででしょう。)
- c. *(壁を塗ったんだって?) べとべとにわ (べとべとにでしょう。)
- d. *(指を切ったんだって?) この包丁でわ (この包丁ででしょう。)
- e. *(学校を休んだって?)
*はやりのインフルエンザでわ (はやりのインフルエンザででしょう。)

第二に、「づら」は(12a)ならびに(12b)にみたように、繫辞(「だ」)や形容動詞に後続することができないが、それに対して、「わ」は(23)に示すように繫辞(「だ」)や形容動詞に後続しなくてはならない。

(12) (再掲)

- a. 外は雪(*だ)づら
- b. (あの娘は)けなげ(*だ)づら (けなげでしょう。)

(23) a. 外は雪*(だ)わ

- b. (あの娘は)けなげ * (だ)わ

(12)と(23)の対比から鮮明になるのは、繫辞「だ」に関して、「づら」と「わ」が相反した特徴を担っている点である。「づら」は「だ」とは決して共起できない。それに対して、「わ」は繫辞の終止形「だ」や、時制などをもつ主文に後続しなくてはならない。

第三に、「づら」は(11)(再掲)にみるように、副詞にも直接後続できるのに対して、「わ」はそれを許さない。

(11) (再掲)

- a. がちゃがちゃに づら
(片づけた結果として)がちゃがちゃに(乱雑に)でしょう。)

- b. バタンと づら
(ドアを閉め)バタンとでしょう。)

- (24) a. *がちゃがちゃにわ
- b. *バタンとわ

そして第四点として、「わ」が主文現象を示すのに対して、「づら」は必ずしも主文現象を示さない。世界の言語には、広く、主文にのみ観察される主文現象がある。たとえば、英語の主語と助動詞の倒置や、付加疑問文がその典型的な例であることはよく知られている。

- (25) a. This is a house.
- b. Is this a house?
- c. I wonder if this is a house.
- d. *I wonder (if) is this a house.

(25)に示すように、主語と助動詞の倒置が起きるのは主文内でのみであり、埋め込み文の中では許されない。同様に、付加疑問文は、(26a)や(26c)などの主文でのみ許され、(26b)に示すように、埋め込まれた文では許されない。

- (26) a. This is a house, isn't it?
- b. *You know that this is a house, isn't it?
- c. You know that this is a house, don't you?

日本語の「わ」と「づら」は、文末にあらわれ、また、以下に再掲する(19)ならびに(20)に示したように、「の」に導かれた節に埋め込まれることも

なければ、疑問詞「の」に選択されることもない。その点において、両者は主文現象を示すかのように見える。

(19) (再掲)

- a. 芳夫は、またスイスに行くづら
- b. 芳夫は、またスイスに行く (*づら) のを楽しみにしている
- c. 三和子は、またスイスに行くわ
- d. 三和子は、またスイスに行く (*わ) のを楽しみにしている

(20) (再掲)

- a. 芳夫は、またスイスに行くの?
- b. 芳夫は、またスイスに行く (*づら) の?
- c. 芳夫は、またスイスに行く (*わ) の?

ところが、(27) に示すように、「わ」は補文標識「か」に選択されることはできない一方で、「づら」はそれが可能である。

- (27) a. 外は雪だ (*わ) か?
- b. 外は雪づらか? (外は雪だろうか)

- (28) a. 明日 規子さんが来る (*わ) か 電話できいてみよう
- b. 明日 規子さんが来るづらか 電話できいてみよう

日本語「わ」が、この点においても主文現象を示すのに対して、(28) は、伊那方言の「づら」については少なくとも典型的な主文現象を示さないことを示唆している。すなわち「わ」は主文でしかあらわれえない文末表現であると思われるのに対して、「づら」は、単純に主文の文末表現であるとはい

えないようなのである。よって、ここに「づら」は文末表現「わ」とは異なる統語的性質を持ち、構造的特徴も異なるとみなすことができる。

「づら」は、いったいどのような構造的な位置にあらわれるのだろうか。上記した観察事実からは、ひとつの可能な一般化がひきだされる。それは、「づら」は(29)に示すように、繫辞「だ」のあらわれうる位置のあたりで推量などの法性をあらわしているというものである。〈だ・づら〉は、「だ」ならびに「づら」のいずれもがくゝの位置に生起できることを示している。

- (29) a. あれは誰 〈だ・づら〉
- b. 明日は雨 〈だ・づら〉
- c. (あの娘は) けなげ 〈だ・づら〉
- d. あの電車は新宿から 〈だ・づら〉
- e. コンサートは2時まで 〈だ・づら〉
- f. (壁を塗ったんだって?) べとべとに 〈だ・づら〉
- g. (指を切ったんだって?) この包丁で 〈だ・づら〉
- h. (学校を休んだって?) はやりのインフルエンザで 〈だ・づら〉
- i. ガチャガチャに 〈だ・づら〉
- j. バタンと 〈だ・づら〉

2節での結論を確認するために、このパラダイムが次に示す「わ」のパラダイムと相反した特徴を示していることをみておこう。「だ」や「づら」のあらわれうる場所には「わ」は決してあらわれることはできない。

- (30) a. *あれは誰 わ
- b. *明日は雨 わ
- c. *(あの娘は) けなげ わ
- d. *あの電車は新宿から わ

- e. *コンサートは2時まで わ
- f. *(壁を塗ったんだって?) べとべとに わ
- g. *(指を切ったんだって?) この包丁で わ
- h. *(学校を休んだって?) *はやりのインフルエンザで わ
- i. *ガチャガチャに わ
- j. *バタンと わ

では、「づら」とはいかなる統語的性質をもつのか。「づら」は(7)ならびに(8)(31a-b)に再掲)にみた「づら」は、(時制やアスペクトを伴った)動詞句や形容詞句に後続する。また、(9), (10), ならびに(11)などの例((31c-g)に再掲)については、繫辞「だ」は「づら」の前では音声的にあらわれないと仮定すると、「づら」は文を補部とする要素として、その分布が説明される。以下の例において、[だ]は、繫辞「だ」が音声的に表出されていないことを示している。

- (31) a. 今ごろ、電車に乗っている づら (= 7)
- b. かわいい づら (= 8)
- c. あの誰 [だ] づら (= 9a)
- d. 明日は 雨 [だ] づら (= 9b)
- e. あの娘は けなげ [だ] づら (= 9c)
- f. あの電車は 新宿から [だ] づら (= 10a)
- g. がちゃがちゃに [だ] づら (= 11a)

この繫辞と「づら」が隣接することができず、繫辞「だ」は「づら」の前では音声的にあらわれない特徴は、本稿の冒頭で紹介した「だろう」の特徴に通ずるものである。

- (32) a. 今ごろ、電車に乗っている だろう
- b. かわいい だろう
- c. あの誰 [だ] だろう
- d. 明日は 雨 [だ] だろう
- e. あの娘は けなげ [だ] だろう
- f. あの電車は 新宿から [だ] だろう
- g. がちゃがちゃに [だ] だろう

では、伊那方言の「づら」は、「だろう」と共通する統語特性をもつのだろうか。次節では、「だろう」と「づら」の統語特性について対照的に考察しつつ、上記に示した記述をより正確に分析してみよう。

3. 「づら」と「だろう」: 生成文法理論に基づく分析

前節では「づら」は、いわゆる日本語の文末表現「わ」とは主文現象に関する特徴において異なる性質を示すばかりではなく、繫辞の要素に関する点において大きく異なる性質を示すことを述べた。すなわち、「づら」は、文末表現にあらわれるいわゆる終助詞とは性質を異にし、「だろう」と同様に認識様態のモダリティ (epistemic modality) である可能性がある。上記の記述に基づいて、以下では「づら」に見るモーダルとしての特異性に鑑みつつ分析してみたい。

Saito (2015) は、上田 (2007), Haraguchi (2012), Saito and Haraguchi (2012) など多くの先行研究に観察されてきた法表現についての階層性が、生成文法のミニマリスト理論のもとで、自然に説明される可能性を示唆している。上田 (2007) は、モーダルが以下のような構造をもっていると提案している。

- (33) [U-modalP [E-modalP [TP ... T] E(pistemic)-modal] U(terrance)-modal]

上田 (2007) は, E(pistemic)-modals には「だろう」「でしょう」「まい」, U(terance)-modals には「ろ・え」「なさい」「な」「よう」「ましょう」「よう」「まい」などが含まれるが, 一つの句に二つのモーダルは共起できないことを指摘している。

- (34) a. 君はそこへ 行くだろう (*な)
 (君はそこに行ってはならないでしょう。)
 b. 太郎はそこへいく まい (*だろう)
 (太郎はそこへは行かないだろうと思う。)

Saito (2015) は, この一般化が, 更に, 他の言語にも見られることを指摘する。

- (35) a. *John may can solve the problem
 b. John may be able to solve the problem

英語において, 単文にひとつの法をあらわす助動詞しか含まれないとする観察はよく知られている事実であるが, Saito (2015) は, 日本語のみならず, 他言語においても観察される興味深い一般化は, ミニマリスト理論の下で, 法表現の担う形態的特徴として説明されると提案している。法表現が時制を含まない日本語においては, モーダルは, TP(時制を伴う命題)あるいは μ P(時制を伴わない命題)を補部として選択すると仮定すると, 日本語も他言語と同様の説明ができるとし, さらにそれぞれの法表現の特性が上田 (2007) の提案した (33) のモーダルの階層性を引き出す要因となっていることを論証している。(詳細は Saito (2015) を参照されたい。)

本稿では, Saito (2015) の提案の中で, 本論に直接関係する認識様態のモダリティ (epistemic modality) をあらわす「だろう」に絞って考察することにしよう。Saito (2015) は, 「だろう」などの認識様態のモダリティ (epistemic

modality) の表現は, その特性として, その補部に, TP (Tense Phrase) を選択すると分析している。主要部である T は, 現在あるいは過去のいずれをも担い, 具体的には動詞「ーる」形あるいは「一た」形, もしくは形容詞「ーい」形, あるいは「一かった」形を選択する。

- (35) a. 太郎はそれを食べるだろう
 b. 太郎はそれを食べただろう
 c. その冬は寒いだろう
 d. その冬は寒かっただろう

しかし, 認識様態のモダリティ (epistemic modality) 「だろう」は動詞や形容詞の語幹に接辞としてあらわれることはできない。

- (36) a. *太郎はそれを食べだろう
 b. *その冬はさむだろう

Saito (2009, 2015) によれば, 「だろう」は, 時制を伴う命題を補部として選択し, このような特徴が上記の (31) に示された ModalP がひとつしかあらわれない性質をも説明すると論じている。それは, T (時制) を選択する認識様態のモダリティ (epistemic modality) 「だろう」は, ModalP は選択できないためである。

この分析は, 伊那方言の「づら」についても説明力をもつ。伊那方言においても, 単文にはひとつの法表現しか許されない。

- (37) 太郎はそこへいく まい (*づら)
 (太郎はそこへは行かないだろうと思う。)

また、「づら」は、時制 (T) と伴った命題を選択し、動詞や形容詞の語幹に認識様態のモダリティ (epistemic modality) 「づら」が接辞としてあらわれることはない。

- (38) a. 太郎はそれを食べるづら
 b. 太郎はそれを食べたづら
 c. そこの冬は寒いづら
 d. そこの冬は寒かったづら

- (39) a. *太郎はそれを食べづら
 b. *そこの冬は寒づら

このことは、(31c-g) と (32c-g) に述べた繋辞に関する共通点も説明しよう。先にも触れたように「だろう」と「づら」は、共に音声的にあらわれない繋辞「だ」に導かれた句に後続する。「だ」は、「だ」が音声的には表れないことを示している。

- (31) a. 今ごろ、電車に乗っている づら (= 7)
 b. かわいい づら (= 8)
 c. あの誰 誰 [だ] づら (= 9a)
 d. 明日は 雨 [だ] づら (= 9b)
 e. あの娘は けなげ [だ] づら (= 9c)
 f. あの電車は 新宿から [だ] づら (= 10a)
 g. がちゃがちゃに [だ] づら (= 11a)

- (32) a. 今ごろ、電車に乗っている だろう
 b. かわいい だろう

- c. あの誰 誰 [だ] だろう
 d. 明日は 雨 [だ] だろう
 e. あの娘は けなげ [だ] だろう
 f. あの電車は 新宿から [だ] だろう
 g. がちゃがちゃに [だ] だろう

「だろう」「づら」は、その補部として、(31a-b) や (32a-b) に示すような (時制を含む) 動詞句や形容詞句を選択するばかりでなく、以下にまとめるように、繋辞 ((「だ」), 「だった」) を含む補部についても、T を含む時制句を選択する。

「だろう」や「づら」に先行する「だ」が形態・音韻的な理由によって発音されないとすると、(40c) ならびに (41c) が示すように、繋辞の時制が過去 («だった») であるときには、そのままの形で音声化されることを予測するが、実際その予測は言語事実と矛盾しない。

- (40) a. 雨 [だ] だろう
 b. 雨 [だ] づら
 c. 雨 だった づら

- (41) a. 東京から [だ] だろう
 b. 東京から [だ] づら
 c. 東京からだった づら

また、冒頭 (5) で紹介した湯澤 (2003) の観察「明日は学校へ行くんづら」といった「ん (の)」を「づら」が選択する点においても、「づら」の特徴は「だろう」(「明日は学校に行くのだろう」) の特徴と共通する。

- (42) a. 明日は学校へ行くん [だ] づら
 b. 明日は学校へ行くの [だ] だろう

「ん(だ)づら」は「の(だ)だろう」と同じ意味をもつ。ここに、「づら」は「だろう」と同様に、TPを補部にとる接辞であるという分析が説明力を持つと結論づけることができる。「づら」は「だろう」と意味的にも統語的にも共通する特徴をもち、「づら」は「だろう」と同様に時制句(TP)を補部として選択する。このことは、Saito (2015)の提案が、伊那方言「づら」の特性についても、説明力を持つ可能性を強く示唆するものである。

しかし、「づら」と「だろう」とには、相違点もある。「づら」と「だろう」が何を選択するかについては、共通した特徴を両者はもつ。Saito (2015)の述べるように時制を含む命題を選択するのである。しかし、「づら」と「だろう」が、何を選択されるのかには違いがあるようなのである。(43b)と(44b)に対比に示されるように、「づら」は複合名詞句の中にあられることはできない。

- (43) a. わざわざ雨が降るだろう週を選んで、行くことはない
 b. *わざわざ雨が降るづら週を選んで、行くことはない

- (44) a. あの子が毎週通うだろう道を 念のため歩いてみた
 b. *あの子が毎週通うづら道を 念のため歩いてみた

「だろう」は、時に文修飾句として複合名詞句内にあられることができるが、伊那方言では、(少なくとも今回のインフォーマントによれば)関係節あるいは文修飾句の一部として「づら」はあられえない。「づら」を選択しうるものは、「だろう」のそれとは異なる部分を含む。

さらに、三河方言の「だら」などでは、会話において「だら?(でしょう?)」

と聞かれて「だらー(でしょう)」と答えるやりとりが可能であるのに対して、「づら」ではそのような会話は不可能である。つまり、会話において「づら?(でしょう?)」と聞かれて、「づらー(でしょう)」と答えるやりとりは伊那方言では許容されないのである。これらについては今後の課題としたい。

また、伊那方言には、「づら」の他に「つら」という静音の異形が存在することも、今後の問題として挙げておきたい。

- (45) a. いっつら
 b. あっつら

ここで注目すべきは、「づら」と「つら」が、伊那方言では共存している点である。(46)に示された例はすべて文法的であり、(46a)と(46b)、ならびに(46c)と(46d)の意味に差はない。

- (46) a. きのうちつ 畑 いっづら (きのうちあたりに 畑にいっただしょう。)
 b. きのうちつ 畑 いっつら (きのうちあたりに 畑にいっただしょう。)
 c. さぞ、つらかったづら (さぞ、つらかったでしよう。)
 d. さぞ、つらかつら (さぞ、つらかったでしよう。)

ここで特に興味深いのは、「つら」は、動詞や形容詞の語幹についている点、そして(時制やアスペクトをもつ)動詞に自由につく「づら」とは異なり、それが過去あるいは過去完了の意味しか持たない点である。

- (47) a. 明日えつ、畑にいくづら (明日あたりに 畑にいくでしよう。)
 b. *明日えつ 畑 いっつら (明日あたりに 畑にいくでしよう。)

「づら」がどんな時制やアスペクトを担う動詞とも共起できるのに対し、

(32b)のように「明日」という時を未来の時をあらわす副詞と「いつら」は共起できない。ここで導き出される一般化は、「づら」が過去のみならず未来についてもあらわす生産的な表現であるのに対して、「つつら」は、動詞の語幹に接辞としてつき、過去あるいは過去完了の意味でしか用いられない。これについては、別の機会に詳細に検討することにするが、今後の研究への示唆を含めて、少し議論をしておきたい。

「つつら」と「づら」が共存していることに筆者が気付いたのは、湯澤(2003)の集めた伊那方言の膨大な発話資料を整理していたときのことである。ここに、方言を記録し、記述し、文字化して後世に残す意義が見いだされる。湯澤(2003)の挙げた例を示しておこう。(例文は、原本のままである。)

- (48) a. 食べたくなくてキツラ。たけだのおたぐりはうまいぜ。
b. コネエダ 一緒に電気館で 映画を見ツラ？

(48a)は、「食べたくなくなってきたでしょう。たけだのおたぐり(馬の腸を煮込んだ伊那谷に伝わる郷土料理)はおいしいよ」という意味であり、(48b)は、「このあいだ、一緒に電気館で映画をみただろう？」という意味である。この記述をもとにして、今回の研究プロジェクトのインフォーマントに、(47)ならびに(49)のパラダイムを示したところ、上記の一般化と矛盾しない文法判断が得られている。

- (49) a. 来月、電気館で、映画をみるづら？
(来月は電気館で映画を観るでしょう？)
b. *来月、電気館で、映画をみつつら？
(来月は電気館で映画を観るでしょう？)

(47b)ならびに(49b)は、いずれも非文であると母語話者に判断されてい

るが、それは、明らかに未来を示す副詞的な要素と「つら」が共起できないという文法知識を、母語話者が無意識にもっているためである³⁾。動詞の語幹に付く「つつら」が、歴史的に文法化され、再分析され、「動詞」に「づら」がつく過程が生じたとすれば、その変化の過程は、「つつら」が動詞などの語幹を選択する段階から、時制句を選択する「づら」へと変化したということになる。それがもし逆の方向への変化であったとしても、生成文法は、選択や併合のプロセスの歴史的な変化について、自然な説明をあたえる可能性を秘めている。

4. まとめにかえて

持続可能な社会は、多様性をみとめあうことにおいて実現可能となりうる。言語は人のアイデンティティであり、方言の多様性をみとめ、守ることは、持続可能な社会を築くための基礎となる。

本稿は、消えゆく方言の特徴を記録することの緊急性に鑑み、伊那方言を特徴づけてきた「づら」の文法について、湯澤(2003)のデータを整理し、それを基礎として記述した。生成文法理論を背景として、パラダイムを作り、母語話者に文法判断を仰ぐことによって、伊那方言の文法を記述し、一般化し、そこで観察された事実と一般化について、生成文法理論の枠組みで説明することを試みた。

本稿では、伊那方言「づら」は認識様態のモダリティ(epistemic modality)の表現であり、その選択の特性に関して「だろう」と共通することを示した。Saito(2015)は、「だろう」などの認識様態のモダリティ(epistemic modality)の表現がその補部にTP(Tense Phrase)を選択するとする提案をしている。本稿では、その分析が、伊那方言「づら」についても説明力をもつ

3) 湯澤(2003)は「見ツラ」と標記しているが、発音は「見つつら」となる。

ことを論じ、伊那方言「づら」の統語的分布もまた、選択的な特性によって説明されうることを示唆した。

謝辞

本稿は、南山大学パッヘIA研究奨励金(2017)の支援を受けた研究プロジェクトの成果の一部である。

本プロジェクトは、多くの方に支えられている。2016年、黒木邦彦氏の方言研究に随行して伊那・飯田地方を回り、また氏には村杉の担当する演習Iにも訪問していただき、フィールドワークの方法論や史的な視点からの日本語文法研究についてご教示いただいた。伊那方言についての詳細な文法判断と記述については、長期間にわたり実母(村杉恵美子氏)に仰いだ。また、江口弥優氏(飯田方言話者)ならびに南山大学外国語学部英米学科 演習(筆者担当)のゼミ生たち、森田芳夫氏(伊那方言話者)、矢島規子氏(伊那方言話者)との方言についての談話から多くの示唆を得た。理論的な分析をするにあたっては、齋藤衛氏から貴重な示唆をいただいた。また、『アカデミア』編集委員には、丁寧な形式チェックをしていただいている。ここに記して深く感謝する。

本研究を進める過程は、父の最期を迎える時期と重なっていた。地方の文化を調査し、記述し、理論的に説明することの楽しさを教えてくれた父に、感謝と尊敬をこめて本稿を捧げたい。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130. 33-49.
- Haraguchi, Tomoko. 2012. Distributions of modals and sentence final particles: Selection or something else?" Presented at the Thirteenth Workshop of the International Joint Research Project on Comparative Syntax and Language Acquisition (February 20, 2012), Center for Linguistics, Nanzan University.

- Saito, Mamoru. 2009. Selection and clause types in Japanese. Presented at the International Conference on Sentence Types: Ten Years After (June 26-28, 2009), Goethe Universität Frankfurt am Main.
- Saito, Mamoru. 2015. Cartography and Selection: Case Studies in Japanese. In Ur Shlonsky, ed., *Beyond Functional Sequence*, Oxford University Press, New York, 255-274.
- Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi. 2012. Deriving the cartography of the Japanese right periphery: The case of sentence-final discourse particles. *Iberia* 4(2). 104-123.
- 井上和子 1976. 『変形文法と日本語 上・下』大修館.
- 上田由紀子 2007. 日本語のモダリティの統語構造と人称制限 長谷川信子(編) 『日本語の主文現象——統語構造とモダリティ』ひつじ書房, 261-294.
- 仁田義雄 1991. 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 湯澤敏 2003. 『おらが知ってる伊那の方言』しんこう社.